

# お茶の水女子大学リベラルアーツとFD公開シンポジウム

平成 20 年 9 月 17 日 (水)

## 質疑応答

コーディネーター

浅本 紀子 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授)

新井 由紀夫 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授)

新井：新しくLA科目として授業を組み換えなければいけないという中で、それを経て、やっと1学期が終わったという後の、こういう形でまたしゃべられるという大変なご苦勞をしていただいたわけです。

今日はこの後、時間を 25 分～30 分ぐらい取ってパネルディスカッションに移ります。4人の先生方には、今回やったことの紹介をしていただきましたが、できれば、特にLA科目として、あるいは系列科目として意識して授業を組むときに考えたこと、意識したことを一つお話しいただきたい。あるいは、またLAの科目で新しく作ったという自分の意識とか努力が、学生の反応に対してはどのように出てきたのか。もしそういうことでお気づきになったことがあれば、ほかの先生方の科目に対するコメントでも結構ですから、そういうものを含めて、LA科目として今回やってみて良かったこと、あるいはデメリットや問題点をご指摘いただきたい。そういうことを念頭に起きつつ、パネルディスカッションのほうに移りたいと思います。

この休みの間に回収させていただきましたパネリストへの質問用紙をもとに、質問事項をもう少し整理した形で、4人の先生方にぶつけていきたいと考えております。

また、質問用紙は今これでもう受け付けを打ち切るというわけではなく、ぜひ書いて残していただいて、今後のこちらの参考にさせていただきたいと思います。もし今お持ちでしたら、あるいは直接口頭でもこの場で会場からの質問も受けたいと思います。では、今、手元に来ているものをもとにして、質問を口切りという形で始めさせていただきたいと思います。最初に先ほど私が述べましたが、LA科目として、あるいは系列科目として、今度初めて作り直してスタートしたわけですが、それについて質問が頼住先生の方に来ております。

頼住先生への質問は、「LAになって授業の視点というものを換えられたそうですが、学生たち、また先生ご自身の中で、新たな物の見方が現れたのでしょうか」。つまり、LA科目という形で授業を組み換えることで、新しい科目にしたことで、作っていく上で自分の中にも何か新しい考え方が出てきたのだろうか。あるいは学生の中にそういう反応が出たのだろうかという質問が参りましたので、頼住先生にまずお聞きしますが、もしほかの先生方にもこれについてご意見がありましたら、その後お答えいただければと思います。

頼住：一番大きく変えた点は、今まで視聴覚教材を使わないで、歴史とか教義についての説明というようなことで基本的にはお話をしていたのですが、今回、儀礼という感覚的な要素をお話するというので、私自身、ビデオ教材を使いたいということで、幾つか宗教に関するビデオを見て、その過程で非常にある種の偏りがあるということが分かってきて、それで宗教についての新たな視点がかなり明確化されてきたということはあるのです。

どういうことかといいますと、先ほどもちょっと言及しましたが、宗教的な儀礼のいいビデオが、特にイスラームとキリスト教に関して見つからなかったの、幾つか見ておりましたところ、世界遺産に登録されている宗教的な建築物を紹介するビデオがありまして、それはすごく充実したビデオでした。ただ、イスラームの宗教的な建築物に関しては、イスラーム教の人たちが地面にぬかずいて礼拝している場面をかなり長く映しているものがあったのですが、これに相当するキリスト教の礼拝の場面を探したいということで、かなりの巻数を全部見ていったのですが、一切ないのです。キリスト教の場合は、教会堂の中を観光客が見て回っているビデオしかなくて、それは欧米で作られたビデオだったのです。

一体これは何を意味しているのだろうかと考えたところ、これはある種のオリエンタリズムであるし、イスラームに対するある種の偏った見方が、そういう映し方になったのではないかと。つまり、キリスト教の場合は礼拝を映さないで、イスラームの場合には非常に特徴的なぬかずいている場面を延々と映していくというのは、とらえ方にある種の偏りがあるのではないかと思います。私自身、ビデオ教材を見なければそういう形では気付かなかったと思うので、こういうことは本当は授業で話したかったのですが、ビデオを見せるころにはかなり時間が詰まっていた、これを話し出すといういろいろな前提を話さないとうまく話せないの、結局そこはビデオを見せないで、仏教と神道だけのビデオでお話して、それでも時間ぎりぎりだったのです。

学生にはまだそのことはうまく私の中でまとめて伝えることはできないのですが、私の中で今回ビデオをいろいろと検討したことでそういう視点が生まれてきました。この宗教が感覚的な要素をどう与えるのか、それがどう正しく与えられるのかという偏りの問題とか、またオリエンタリズムの問題、その辺りをもう少し授業の中で今後伝えていけたらいいなという視点が出てまいりました。まだ私の方でその辺がまとまっておりませんので、学生の中で特にそういうことではありませんが、今後その辺りにも働

きかけてお話をしていきたいと思っております。以上です。

新 井：ありがとうございます。今の頼住先生のお話は、学生に対するメッセージを、あらためてLAの授業として組み込むことで、その問題点にかなり先鋭的になったというお話だったと思います。

頼住先生のお話の中では、LA科目の系列を作る過程の中で、ディシプリンとしての宗教学と、系列に合わせてのテーマ設定をどう折り合いをつけるかという点で、いろいろご苦労をされたというお話でした。その点についてはとりわけ棚橋先生の授業内容が、ディシプリン型の文化人類学からテーマ系の文化と環境へという形で、大きく舵を切っているとおっしゃいました。その点のご苦労、あるいはその視点の変化についての意識された点等で、もしありましたら、関連させてお話を伺えればと思うのですが、いかがでしょうか。

棚 橋：基本的にはディシプリンとしてのという話も最初の方でやってはいたのですが、基本的には人間の行為とか行動とかに視点を分解させてしまって、その中で、人文系ならばこう見る、それプラス人間は生き物でもありますから、ホモ・サピエンスとしてはこうだということをカップリングして話すようにして、トピック型への対応を自分では考えました。

それと、系列を持った科目群であるということなので、あえて、こういう点はほかのこの授業の多分こういうところで話されるはずだという宣伝役も少しすることを心がけたというのが大きな対応かと思えます。

新 井：そうすると、棚橋先生は、まず一つは学生の側が例えば文系であればこういう視点で物を言ってくるだろう。あるいは、理系であればこういう視点でとか、幾つかの相手方の質問、見方の切り口をあえて立てて、そこでテーマで議論させる、自分なりに組み立ててみるということの一つは意識されたということですね。

棚 橋：そうです。

新 井：もう一つは、系列として、よその科目との橋渡しを意識されているということも含めて、位置付けを意識するということを授業の中で心がけられたということでしょうか。

棚 橋：はい。橋渡しよりも綱渡りの方が大きかったと思います(笑)。

新 井：ありがとうございます。ほかの先生方はいかがでしょうか。今の点についてご意見はございますか。よろしいですか。

では、二つ目の質問は千代先生にです。文科系の学生と理系の学生、今、文系とか理系の学生によって、レベルの違い、あるいはもともと持っているバックグラウンドの違いの違う学生に対してどういうことをやるのかという視点への目配りが必要だというお話でしたが、それも関係するかもしれません。質問をぴたり一言でいうと、「文系と理系の学生とで質問の内容等で差がありましたでしょうか。あるいは授業態度の差等で感じたことはありますか。お教えてください」ということです。

千 代：分かりました。まず文系、理系の前に、私は今まで医療従事者教育といいますが、医学生と看護学生を相手にもう二十数年ずっと教育をしてきたのです。医療従事者系の学生と、本学のような一般学生の違いというのはめっちゃくちゃ大きいんですね。だから、医療系の学生は自分が医療を提供する立場から講義を一生懸命聞いて、それを自分の事実や知識に加えようとする態度が非常に強いのですが、本学の学生は、本当に素直に、すべてそういう立場ではなくて、学問としてあるいは新しい知識として聞く態度があって、非常に自由に聞いてくれますので、そういった意味では講義はもうえらく感じが違うという、それがまず一つありました。

もう一つは、理系と文系でどうかということですが、一つ面白いのは、席は決まっていないのですが、理系の学生は前の方に陣取るのです。文系の学生はどちらかというと後ろの方に行くのは、これは何ででしょう。もしかしたら、文系の学生が1年生が多かったからかもしれません。

そういう違いが一つあったのと、やはり講義が分からなくなると、理系の学生は講義についてこれなくなったのがなかなか分からないのですが、文系の学生はすぐに分かるのです。隣にちょっと、そわそわし出したりして。そういうときはこちらから質問するように、理解度がどのくらいできているかということ、ついてこられているかどうかということに適宜、文系の学生は1日目で大体分かりましたので、何人かをマークして質問するようにはしておりました。

確かにいろいろな講義中に、教師の方にすごく全感覚をもとに一生懸命注意するのは文系の学生でして、理系の学生はどちらかということこちらを見ないで、一生懸命ノートを取っているという感じで、態度が少し違うなという感じいたしました。ただ、それほど大きな違いはございません。

新 井：普段そうですね。医療系の学生という目的意識の非常にはっきりしている方々に対してやるのと、自由に、フリーに授業を聞くと  
いう学生との差というのは、はっきり出ておられる。また、そういう自由な発想の質問というのは非常に面白いということですね。  
文系の学生というのは確かに最初から後ろに座るといふカルチャーがなぜかあるのですが、それはなぜかよく分かりません。

今の文系、理系ということでは、香西先生の授業の今日の紹介の中でちょっと思ったのですけれども、学生のコメントが、  
最初のころは文系の学生、例えば文学の学生が書く感想というのは非常に表現が文学的で、つまり数字とか何ミリリットルとか  
そういうのにこだわらずに書くのですけれど、後ろの方に行くにつれて感想が融合してきているなど。そういう文理の差というの  
が、要するに大学に入って、1年生がもともと文系人間、理系人間に分かれているわけではないのですけれども、そういう形の答  
え方を皆さんがどうもしたがる。そういうものが、文理融合の演習の中で、お互いに見ながら一緒に自由な発想が取れるようになっ  
ていくというのが、どうもこの感想などを読んでいて、そんな気がしたのですが、いかがでしょうか。

香 西：今の新井先生のお話のように、本当に私もそう思いながらレポートを読みました。今日ご紹介したのはほんの一部なのですが、  
全体的に最初の方はちょっと幼稚な表現とかが多かったのが、だんだんと文系・理系にかかわらず、今度やってみようとか、こ  
ういうふうにしたらどうだろうとか、積極的に次の条件を考えたり、それもレポートを見ただけで文系、理系など全然分からな  
いぐらい融合していましたので、先生の感じられたとおりでと思います。それと、家庭科は高校までみんな一緒に受けていて、  
高校を卒業してすぐの1年生なので、私の授業に関しては文系・理系の差はなかったように思います。

一つ付け加えさせてもらおうと、私の調理学研究室の初代教授が、「調理のこつが真実ならば、そこには科学があるはずである」  
という言葉を残しておられます。食物の学生にはよく言うのですけれども、調理のこつと科学ということで、少しでも授業を受け  
た学生が、頭の片隅に残っていれば、ずっと死ぬまで調理をしますと思いますので、そういうところできっかけになればいいと思っ  
て授業をしていました。

新 井：ありがとうございました。お互いの先生方の報告について、それぞれ何かおっしゃりたいことというのが、特にございますか。  
今すぐになれば、また後でも結構ですけれども、よろしいですか。

では、全体に関するご質問、ご意見が幾つかありまして、それをご紹介させていただきたいのですが、お一人の方は、「今回、  
非常に大変貴重な実践例であると思いますが、ただし文理融合の度合いについて、やや疑問がある」と書かれています。「構  
想から実施に至るまで文理双方の教員の協力が不可欠であって、従来のオムニバスの授業、両方がただ乗り入れて部分担当  
で断片的に授業をやるのではうまくいかないだろう。そういう点で文理融合が果たしてきちんとされているのだろうか」というご  
質問があったのです。

このご質問あるいは疑問について、できればこのご質問を書いていた方に、もう少し詳しく質問について述べていただき  
たいと思うのですけれども、よろしいでしょうか。ありがとうございます。

吉 永：東京農工大の吉永です。ゲスト参加させていただいて偉そうなことを言っているように聞こえるのですが、自分でもできないこと  
を言っておりまして、ぜひお茶の水には文理双方の資源がそろっているようですので、授業を作る段階から、複数の先生が協働  
して構想していただくような科目ができると、ほかの大学にも参考になるのではないかと思います。オムニバス授業というのは、  
どこの大学でも趣旨自体はいいのですが、なかなかコーディネーターがうまくいかないのです。ですから、そういう例をこれから作っ  
ていただけるとありがたいと思います。

新 井：もしよろしければ、農工大の場合は、例えば文理融合科目とかそういうことの実施について何かご意見とか、あるいはこちらに  
情報提供とかがあれば、ついでにさせていただきたいと思うのですが、よろしいでしょうか。

吉 永：現在、農学部と工学部が完全に分かれておりますので、農工融合科目という新しい科目群を作りまして、農学部の先生と工学部  
の先生が協力して科目を作るといふことをやっております。それこそ最初の段階から一つの科目に複数の先生が協力して、アイ  
デアを出し合って一つの科目を作っていくことをやっていくのですが、今年から始まったばかりですので、どの程度うまく  
いっているのかというのはまだ実情を把握していないような状況です。

新 井：その農工融合科目というのは、具体的にはテーマやタイトルははっきりとあるのでしょうか。

吉 永：私もきちんと覚えていないのですが、生命やエネルギーや環境というのがテーマになっていたと思います。

(新井) そうすると両方が乗り入れをしやすいような、大きく緩いテーマにして、それを両方の視点から授業を共同で作っていくといふこ  
とですか。

吉 永：そうです。

新 井：なるほど。分かりました。どうもありがとうございました。

文理の融合というのは果たしてあり得るのかということ、今回のこのLAを作る過程で散々いろいろな議論が出て、無理だという意見がお茶大の中では非常に強く、一部だけがやれるところで、つまり文理融合の度合いは9対1でもいいし、幾つでもいいということではじめたわけです。どうぞ、先生、よろしくをお願いします。

千 代：何か自分のところの宣伝になるかもしれないのですが、実は私たちの遺伝カウンセリングコースは、大学院の修士課程・博士課程一貫教育なのです。これはもともとJSTの方から資金を頂いているのですが、文理融合型のモデルになるのではないかと、うちが採択された非常に大きな条件だったと思います。

うちのコースは学生も全部で1年生から5年生まで45名いるのですが、約半数が生物系や化学系出身、半数が人文や心理の学生です。講義科目も兼任が全部で二十数名いますが、半分が生物系の教員、半数が心理・社会系の教員です。そういった形でカリキュラムは完全に文理融合型で組み立てていますので、大学院ではありますが、一つのモデルになるのではないかと考えております。

新 井：ありがとうございました。そういう点では、生活科学部がもともと文理融合の学部として存在していて、そのノウハウをどれだけ生かせるかということが重要になってくると思ったのですが、本当にどうもありがとうございました。

それでは新しい話に入りますが、寺崎先生の授業要領の中で、導入は非常に具体的な経験からこうやっていく、総括はオープンエンドでもいいとなっていますが、この点について報告された先生方はどう考えるのだろうかということが質問で出ています。これは、まず先生方からお答えを頂くことも大切だと思いますけれども、寺崎先生から今回のこの4人のご報告を聞いて、例えば導入から総括までの流れについて何かお気付きの点がございましたらお話いただければと思います。よろしくをお願いします。

寺 崎：僕は導入のことを申しましたが、それとの関係で先ほど先生方のお話は伺っておりませんでしたので、そのことについては感想は今述べられないのですが、別の角度から、吉永先生がおっしゃったことと関係した論点でよろしいでしょうか。

私は今日伺いまして、幾つも印象的なことがありました。一つは立教のように大きい私学の場合は、総合的な科目、特に文理融合、あるいは立教の場合でしたら文経法理融合になるでしょうか。そういう規模のところで総合科目を運営しておりますと、必然的に不可避なのは大人数講義です。必ずそうなります。ところがこちらはさぞ楽だろうと思っておりましたら、違いますね。400人、200人単位で持っていらっしゃる。ということは、やはりこういう科目を作った場合、大人数になるというのはどうしても避けられないことをあらためて感じました。お茶大は別世界ではないのだと、遅まきながらそう感じました。理想的には、40人ぐらいが一番いいと思います。50人か40人程度だと思います。

申し上げたかったのはそういうことではなくて、今日伺っておりまして、文理融合という目的は非常に重要なことで、立花隆氏が東大生をばろくそに言っている中で、文系の教養と理系の教養がこれぐらい分かれているのはないということを行っていますよね。ですから、非常に大事なテーマだと思うのですが、運営していかれる中で、一つの観点としてお持ちになっていた方がいいだろうと思うのはこういうことです。

概念をいわゆる教養教育のこれを一部と考えるならば、一つ区別しておいた方がいいことがあると思います。一つは、ゼネラル・エデュケーションといわれてきたものと、リベラル・エデュケーションといわれてきたものとは系譜が違うということです。これはあまり知られておりませんが、ゼネラル・エデュケーション、つまり僕らが戦後、一般教育という形で受け取ったあの流れは、はっきり課題を立てることが前提になっているのです。もともとゼネラル・エデュケーションというのは、小中学校の教育改革のための標語として生まれたものだったのです。そのポイントは、いわゆる民主社会の一員としてのアメリカ市民を育てるという背景で出てきて、それが小学校、中学校では社会科になり、また上に上がってきて、一番上はハーバードのいわゆるゼネラル・エデュケーションというものになってきたというのが系譜です。

一方で、リベラル・エデュケーションというのはちょっと違って、これはあらゆる学芸が実は教養なのだという発想です。あらゆる学芸、専門も含めてです。リベラル・エデュケーションの方は、すべてそれは教養なのだという考え方に非常に近いのです。ただし、その際それぞれのディシプリンが教養となるためには、ディシプリンそのものの教え方が、あるいは教師におけるとらえ方が違ってこなくてはいけないのです。

そこで頼りになるのは\*フジサワ\*さんという哲学者がおっしゃっていますけれど、専門学がリベラルアーツといわれるような教養になるためには、専門学がプロト・ディシプリンの部分を取り返さなければいけない、それを持っていかなくてはならないということなのです。プロト・ディシプリンは、実は境界を超えたもの、文系も理系もありません。人間にとって学芸の本質とは何だったのか。原ディシプリンともいえるべきもの、それが教えられたときに初めていろいろな学芸は教養になるということになるのです。

特に、頼住先生と棚橋先生のお話を伺っていると、恐らくプロト・ディシプリンのところに帰ろうとしていらっしゃる。あるいは、

棚橋先生はもともと文化人類学だったから有利だったとおっしゃった。それは文化人類学自身がまだ恐らくプロト・ディシプリンの部分、本来的な超領域部分を持っておられるからだと思いました。

それに対して、千代先生と香西先生の場合は、逆にお一人でなさるにはきついぐらいの広い領域を持っていらっしゃると思います。つまり、実習と調理とその料理としての評価ですね。それを色と香と音、この三つを基盤にしながら、特に色と香と味という感覚を重点において、一つの総合的な活動の中でなさっているでしょう。千代先生の場合は、もっと広範な、初めて僕はゲノム・リテラシーという言葉を知りましたが、本当にそういう非常に広いところに結び付いたことをなさっています。私は、それはどちらかといえばゼネラル・エデュケーションに近いのかなと思いました。ある課題、ゲノムに関する、あるいは遺伝という事実に関するさまざまな課題を学生に与えて考えさせるということをやっていると思いました。

最後に付け加えますと、私は、ゼネラル・エデュケーション的な領域に関していえば、恐らく複数教員担当の方が多分ふさわしいのだらうと思いました、それは多くのディシプリンが協力すべき領域なのではないか。そのように伺って、先ほどから聞いておりました。立教では、例えば仕事と人生とか、戦争と平和とかというような、いろいろなテーマを立てますね。環境と人間、自然と環境とか、これは全部複数の教員が担当しております。

新井：ありがとうございました。今の寺崎先生のお話は、例えばわれわれが文理融合ということで、水と油ではないかと簡単にいってしまいますが、融合の在り方には、例えばディシプリンのプロト的なものまで下がって考える。そういうことを言うような授業があってもいいし、あるいはディシプリン型であっても、課題型のゼネラル・エデュケーションの場合には、幾つかの学問分野が合わさって、オムニバス形式でもいいから、そういう形でみんなが協力して課題的なもの、テーマを議論していくという授業があってもいい。テーマ学習という言葉がわれわれは使っておりますが、その中にはいろいろな在り方があります。それが、また分野によって、やり方の適・不適があるから、それを細かく考えた方がいいというお話ということでよろしいでしょうか。

だいぶ時間が過ぎてしまいましたので、もし、会場の方から一つ二つ、ご意見等があれば、あるいはこちらの先生方からでもいいのですが、しゃべり足りないという方がいれば、それを受けて、時間的にはちょっと超過していますので、あと一つだけ、意見あるいはご質問があれば承りたいと思うのですが、いかがでしょうか。

私、今日は寺崎先生のお話を聞いていて、今自分の子供がちょうど小学校4年生で、1学期に水の学習をやってきたばかりで、ダムの水はどこから来るか、ダムのことを調べるといきなり言われて四苦八苦したのです。ちょっと失敗だったかなと思っていますが、いろいろな形で、自分たちが受けていること、あるいは何気なく見ているけれども、そういうものが全部生かせるのだということを感じました。

どうでしょうか。先生方の方から何かご意見がございますでしょうか。浅田先生、お願いします。

浅田：浅田です。別に手を挙げなくてもよかったのですが、新井先生が困っておられたらいけないと思って手を挙げたのです。

特に棚橋先生と頼住先生の授業実践のご報告で問題になっていた、系列の中のトピックとして教えるのか、それとも例えば宗教の授業が2年にいっぺんしかないなどということが許されるのかとか、そういうことの相剋が非常に大きな問題だと思いました。これは始める前から分かっていたことなのですが、非常に大きな問題だと思いました。

もう一つそれに関連すると、それだけ先生方が頑張って、系列というものの趣旨に何とか合わせようと思っているにもかかわらず、学生アンケートを見ると、この科目を履修した目的というところで、系列に興味があったというポイントはあまり高くないのですね。やはりこれはそれぞれの授業を取りたいのであって、系列についての興味というのはそれほど高くない。

来年、私は「言葉と世界」というのをやるのですが、「言葉と世界」という系列は、多分それで系列に興味があって取るという学生はかなり低いのではないかと私は思っております。そういうことを考えますと、系列の理念とか、当初これは全員どれかの系列を取るような必修化をするべきだという意見がありましたが、それは困難になったという印象を受けています。この辺については、今後LAの部会の方で討議をしていく必要があるかと思いました。実際に実践してみても難しいという点が今日は出てきたのだらうと理解しました。どなたかへの具体的な質問ということではありません。すみません。

新井：確かに学生アンケートでは「系列に興味がある」というのは3割ぐらいですね。必修だからとか、コアが取りたい、あるいは先生のその授業に興味があるということを取ることが非常に多くて、系列を取るということが必ずしも学生には理解されていないというのは、非常にそのとおりだと思います。

ただ、われわれがやっていく中で、系列で取ることの意味というのは、つまり考えることの導入のきっかけを持ってもらいたい。そこからこっちにも関係しているのだよとか、物の発想がどこにつながっていくのかということが、ある程度学生に目に見えるように、次のステップに行けるための、広い意味での科目群というニュアンスで系列を私は考えています。ただ、もちろん作られている先生方によってその意識も違いますし、そういう系列の目標みたいなものを、先ほどの棚橋先生のお話であれば、学生にきちんと見せるべきであるということあまりやっていないわけです。

もう一つは、シーケンスの問題で、つまり系列を取った後どこに行くのか。全体として学生にどういうものを目指して達成させるのかという点の議論も、まだこれからかなという気はいたします。いろいろな点でかなり問題を抱えているということを確認

識して、今日は終わりにするということがよろしいかなと思いますが、そういうことでよろしいでしょうか。  
では、本当に今日は長時間ありがとうございました。最後に三浦副学長、よろしく願います。

三 浦：幾つか出たことに、このリベラルアーツの責任者としてお答えして終わりにしたいと思います。

文理融合というのを前面に出しているわけですが、それは可能なのか、度合いはどうかという問題がずっとありまして、今回の設計においては、一つのテーマの中で文理融合の科目群が入っています。学生は、文系であれ理系であれ、双方のこと、あるいは双方の視点を学びましょうという考え方を取っており、一つの科目の中で文系・理系が融合することはかなり難しい。あるいはそれをやろうと思えば、オムニバス講義になる。オムニバス講義はやはり食い足りないところがありまして、そういう意味で、テーマは文理融合のテーマ。しかし、それはオムニバスの一つの科目ではなくて、10科目用意する。さらには演習も用意するという形でやっていくというのがこの設計の特徴になっています。

もう一つ、学生の動向をアンケートで、期初のアンケートと期末のアンケートを取りあえずお配りしたわけですが、確かに系列として取ろうというのは今のところ3割ぐらいです。ただ、期末のアンケートでは、こういうテーマを掲げたやり方についてはどう思うかということについて、取るのが実は怖かったのですけれども、幸いにして「有意義」という人が3割、「まあまあ有意義」という人が5割ぐらいということで、両方で8割ぐらいという数字が全体としては出てきています。文理融合という考え方についても、「共感できる」「まあまあ共感できる」が7~8割出ておまして、その点について今、新井先生がおっしゃったのですが、文理融合に限らず視点を拡大するという点については、学生の理解を得られているし、それは授業を実際にやられた先生方の授業の効果であろうと考えていいのではないかと考えています。

ただ、現在の設計段階では、非常に実践的にある面では設計して、つまり今いらっしゃる教員の中で何ができるかということで作っておりますので、寺崎先生のご指摘がゼネラル・エデュケーションとリベラルアーツの中で、同じように見えて、違う思考があるという点は、自分の中で感じていた疑問がこれでクリアになったのですが、そういう意味では、プロトタイプとおっしゃったのですが、私のイメージの中ではこういう大きな科目群を動かすことで、学生の中にも教員の中にもディシプリンのプロトができていく。それが、やがて専門教育に向かって大きな花を咲かせるのではないかと、自分の中では考えています。

というのは、お茶大でこれをするものの議論の中に、この大学の場合は3割ぐらいが大学院に進学をします。それが、例えばICUなどの場合と違って点になります。ですから、その専門性をよりウエートを置いて考えつつ、しかし、その専門が長い生涯にわたって花開くようにリベラルアーツをやるにはどうしたらいいかということが、このお茶大の場合の重要な課題になっていきますので、今日、寺崎先生のご指摘は大変ありがたいと思えました。

あと、人数のことを寺崎先生はおっしゃったのですが、設計段階では実は講義は100人ぐらいを想定して組んだのですが、今年度については、五つ用意すべきもののうち三つしか用意できていないということと、前期でかなり一生懸命宣伝しましたので、わっと集まったということもあるので、当然ばらつきは出ると思うのですが、講義でも100人台のものにしていかないと、こういう狙いの授業はうまくいかないとは考えております。以上でございます。

今日、まだいろいろ議論が足りない点もありますが、大変掘り下げた議論をすることができました。ありがとうございました。これで閉会にさせていただきますが、この後、実は寺崎先生にはもう少しお話も伺いたいと思っております、懇親の場も別に用意しておりますので、もう少し話しをしたいという方は、茗荷谷駅の近くの日本海庄屋というお店にちょっとだけ席を用意しておりますので、有料ですが、ご参加いただければと思っております。それでは今日はどうもありがとうございました。

